

六甲山

唐櫃道の観音石仏について

山下道雄

- 一、唐櫃道について
- 二、石籠と道筋について
- 三、石仏の尊容について
- 四、奇進者について
- 五、造建時について

一、唐櫃道について

六甲山系を南北に通じる峠道は、むかしより数多くあって、この唐櫃道もまたその重要な山越えの道の一つであった。

有野村誌によれば

「有野、御影線は上唐櫃を起点として、唐櫃部落を南北に縦貫し、六甲山頂（前ヶ辻）を経て武庫郡御影町に通っている古くより住吉越道としてあり、唐櫃村開祖たる四鬼氏の来住より、仙人、天狗に関する数多くの伝説

を生み、亦唐櫃村の婦女子は頭上に薪を載せて住吉灘地方に売りに行きし道も、男子は牛馬の背に酒米を灘酒倉に運びし道も、この十九折の羊腸路であった」とあり、

また、武庫郡誌に

「六甲山の西部に都賀川あり、上流を六甲川と称す、本流は六甲唐櫃越えなる前ヶ辻より発し」とのべている。前ヶ辻において結ばれるこの道は、唐櫃方面では住吉越え、御影、住吉方面では唐櫃越えと、互いに峠の向うの村落の名称を冠して、呼称していた一筋の峠路であった。そしてこの峠路を越えて、村人は交替の物資を運び、旅人もまた北へ南へと旅をつづけて行ったのであった。

ここに述べる唐櫃道とは、その間の上唐櫃より峠上の前ヶ辻までをさし、裏六甲側の道

筋にあたる。

この山路には、修験道、皇大神宮、妙見、観音信仰等の遺跡が立ち並ぶので、明治の末ごろより六甲山に遊ぶようになった外国人達は、この道を「シユライン・ロード」と命名し、距離約六キロ、歩行登り約二時間降り約一時間半の山路に登山を楽しむようになる。

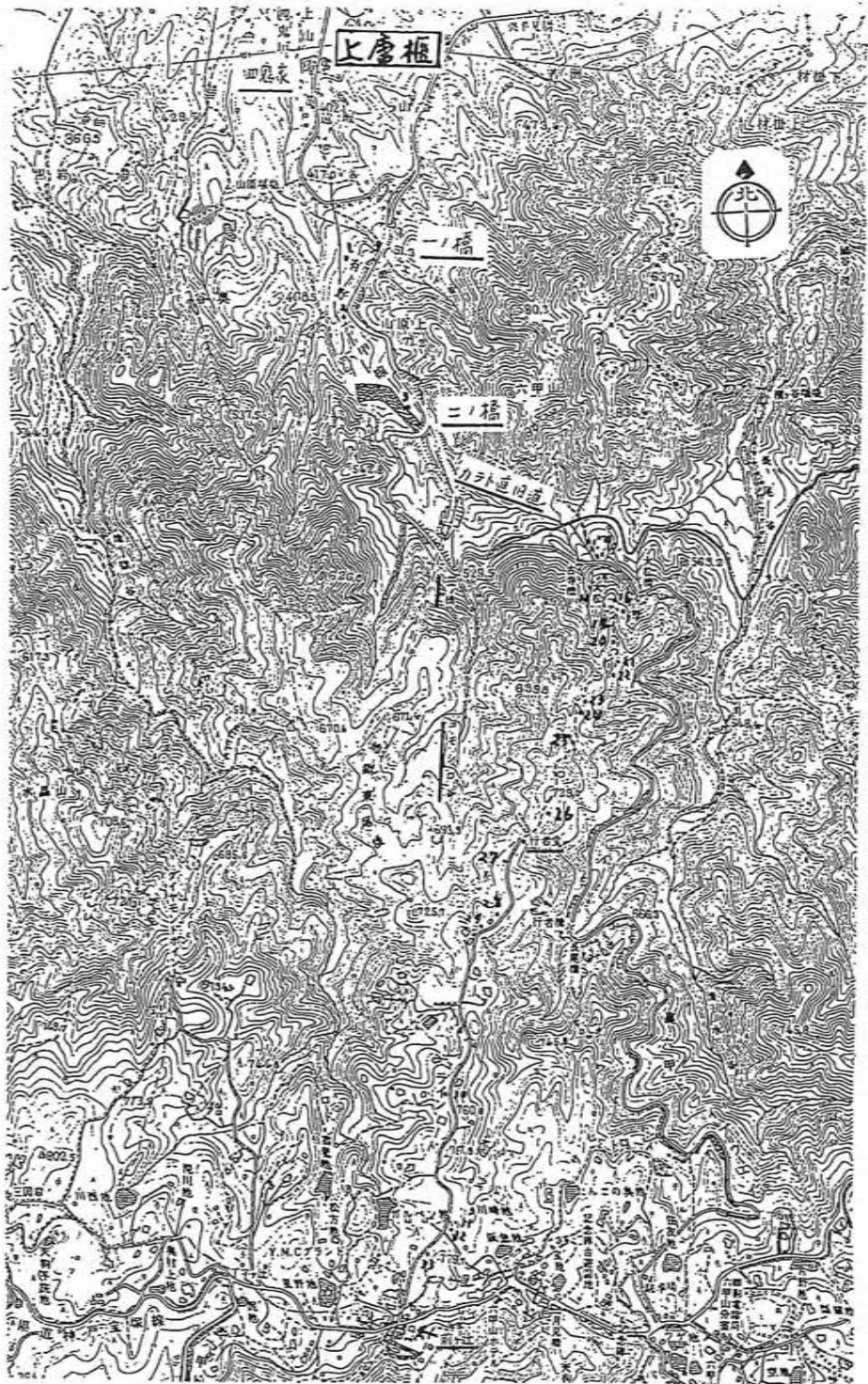
やがて、六甲山の開発は進み昭和初期の「裏六甲ドライブウエー」の開設、戦後のトンネル開通等によって、その半ばより唐櫃へ降る谷間のあたりは、歩く人も次第に少なくなり今では全く草に埋もれている。

本文はその山路に残る、西国三十三ヶ所霊場の観音石仏の調査報告である。

二、石籠と道筋について

上唐櫃の聚落を南へ貫け切り、四鬼家を過ぎて左手の旧道を行き、雑木林に入って小さな流れを過ぎ、やがて二つ目の流れにかかる左手のくさむらの中に、第一番の石籠が残っている。「字山原」の地である。

第二番はそれより南東へ延びる平らな樹林の道を進み、ヨモシロ谷より流れて来る小川



の手前川ぶちの左側上手に見える。

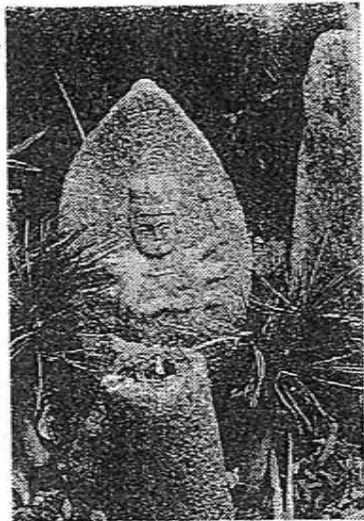
それより流れの左岸に沿って登って行くと上部が二本に分れた大松が立っていて、その根元に第三番はあった。このあたりドライブウエーの対岸にあたる。しかし現在では六甲トンネルより掘り出した岩塊の捨て場が整地され川ぶちに迫る高い石垣がつづいて、その石垣の中から二本の松が上部を出しているかのように見える。

それよりわずかで二ノ橋に出る。

この辺りまでは山歩きに馴れている人なればやっと辿れるであろうが、これより先きの旧道は久しく草に埋もれて通行困難である。旧道は二ノ橋を過ぎて東方の谷間に入り、古寺山より降っている尾根先きを廻って、五六五・二米の降起の西面を過ぎ南へ登ってドライブウエーに出ている。

その間に第四、五、六、七、八番が点々とあった。そしてドライブウエー近くに、番外善光寺仏と第九、十番の三基が並んでいる。

第一番より第八番までの八体と番外一基（地藏仏）は現在一ヶ処に集められて、ドライブウエーを少し西へ降った山麓に並べてまつられている。



三十二番千手観音

簡略なそれでいて堅牢なその石組みから、力を合せ共に汗し苦勞して岩塊を集め、そして管々として積み重ねていったであろう村人達の巧みなる造型技術と手の温みを覚えてくるのは、わたしひとりの感興ではないであろう。

三、石仏の尊容について

この山路に並ぶ石仏は、室町時代以後確立したと伝わる霊場順に聖観音、十一面、千手千眼、如意輪、馬頭、不空羅索、准胝の諸観音像である。

石龕の奥深く約一尺一寸立方の整形された台石が据えられ、その上に幅一尺一寸、高さ

これより先き道はドライブウエーを横断して急坂の狭い尾根上を登り、行者堂に着く。この間に第十一番より第廿六番までがまつられているが、急傾斜地や崩壊のげいしい崖ぎわに立つものは半壊状態の石龕が多い。また左右の深い草むらに埋もれているものもあって数回の探訪を重ねて行かねば容易にそのすべてを見出せないであろう。

行者堂のわずかに上手右側に第二七番、そしてごく小さな隆起を乗り越すと、やがては小型自動車なれば通れるほどの道となり、散策気分で歩める平らな道がつづき、尾根上のあちこちに山荘や別邸を眺めた遠望を楽しむ。

このあたりの石仏は道路に正対し、つねに山上に住む人たちによって付近は清掃され、そのうえ花や線香が供えられているので見落すことはないであろう。

最後の第三十三番は、表六甲ドライブウエー上の「全但ハウス」より約二百米北方、この道筋の最高点近くの東側少し入り込んだ草むらの中に立っている。

つづいて、石仏を守る石龕についてのべる。この山路につづく石仏は、西国三十三ヶ

所霊場の本尊仏になぞらえその一駄ごとに花崗石によって造られた石龕の中にもつられていた。従ってその石龕の数もかつては三十三あった。

しかしその石龕は、各地の寺院の境内や裏山を廻って立ち並ぶ整型された石材で堅固に組み立てられている同型のものではなく、この山路のあたりに散在していた積み重ね易い四角なまたは長方形の自然石をもって壁面を造り、その上に大きく割れた自然石の板状岩塊を覆って、さまざまな型で建造され、その周囲を土で固められているものである。その大きさは、ほぼ一立方程度が多く、扉の設けはなくて正面は開放されている。そして山路より三ヶから十五ヶほど奥に入ったところにあり、その間隔は曲折の多い道や複雑な地形ほど近く、平坦で直行する道筋では遠く離れている。

行者堂より上部のものは山頂へ近付くほど保存状態は良好で造建当初の型態を止め、その完全な原型を見ることが出来る。

それら現在なお石仏を守りつづけ、今後も長くそこに石仏を風雨よりまもりつづけるであろう石龕をジッと見詰めていると、素朴で

約二尺の舟型光背碑が置かれ、その碑面には間弁をつけた蓮座上に、坐像または立像が薄肉彫りに陽刻され、台石の正面に寄進者名が数行に、尊容の頭上には霊場番号が陰刻されている。

しかし台石の大きさにしても、多数の施主が共同して一基を寄進している場合その多くの人名を刻む必要上特に大きく造られたものもあり、後補と思われる新しいものや、寄進者名のない台石もある。

また、舟型光背の型式、化仏、蓮座、尊容の彫法にも変化が見られ、霊場番号の陰刻にも縦書または横書もあり、一団の石工達によって彫造されたものでないのは容易に知ることが出来る。その上、尊容の左右に戒名または先祖代々の銘記が陰刻され供養を兼ねたものも数碑見られる。

特に一見して番外仏と気付く、霊場番号のない三基も併立されている。この番外については後にのべる。

次にこの石仏群像の文化的価値であるが、石仏を石造美術品として評価する場合、現在の時点では南北朝期ころまでの貴族、豪族、高僧達の造立にかかる等身大以上の大型石仏

を研究対象とし、その完好品は文化財として指定されている。

それ以後の建造物は、寄進者の階層が中級者より庶民へと移行してひろまった関係上、次第に小型化すると共にその尊容の様式、彫法も簡素化され風格は失われて退化の道を辿り、硬直した稚拙な作品となるのが通例である。

したがって、この石仏群像もその趨勢に従って小型の部類であり石造遺品として優れたものではなく、庶民的造型様式をあらゆるに伺わせるものである。

しかしながら、川勝政太郎先生がその著書に述べられている通り

「江戸時代における石仏の様式の退化は救いがたいが、庶民の信仰遺物としての面を掘り下げて追求する必要がある」

となると、上唐櫃西光寺の墓地に並ぶ数多くの古い西国巡拝碑と共に、この山村の観音信仰を語りつぐ代表的な文化遺産である。

いよいよ本題に迫って、各観音像の尊容について述べよう。

(イ) 聖観音

この観音の尊容は「立像にして左手は胸の

あたりにツボミをつけた一茎の蓮を捧げ、右腕は垂れてその指先きは左手の蓮のツボミを指す。最も端正な容姿なので、この石仏群も儀軌に近い立像である。ただ何分にも小型の石像なので宝冠の彫出は簡略化され硬直している。

霊場中この観音像を本尊とするのは三ヶ寺で二臂であるべきものが、第二六番（法華山一乗寺）に限って八臂に造られている。

(ロ) 十一面観音

この観音像も二臂で、特長としては頭上に十一面を頂くことである。しかし、この小さな石仏にその複雑な十一面を彫み出すのは困難なので、丸味のあるあたかも数葉の蓮弁をおし並べたかのように、または前面三面のみを浮き立たせたかのように陽刻していて、風化にもなっていないが、石工が化仏を意識して彫み出したノミのあとはいかがわれる。

この石仏群にあっても、二臂であるべき像が第八番は四臂に第二四番は八臂に造られている。

(ハ) 千年観音と千年千眼観音

この観音像は複雑極まる尊容である。本来

なれば、頭上に十一面を頂き、両側に千臂をつけ、その一つ一つの掌に各種の宝器を握り、千眼にあっては、その掌に千の眼をつけるのである。

しかし、この石仏群にあってはそれは不可能であるので、両観音像共に同様に造られ右に上げた二臂のみを忠実に造り出して、その掌に蓮と三叉戟などの宝器を捧げさせている。そして両側に二本づつ短く水平に出した掌をひろげたように彫み出し、胸の前で合掌する二臂と共に八臂の像に造られているものが多い。

(二) 如意輪観音

この観音像は儀軌によれば、一面二臂の左足を下に垂らした半跏思惟像であって、後にはまた四・六・八・十二臂像も説かれる。

しかし、平安時代には六臂座像が定著する。この石仏群も六臂座像に造られ未敷、開花、二茎の蓮華を握る三臂と、思惟をあらわす右手、宝輪を捧げるか胸もとに宝珠を抱く右手が強調されて表現され、右手の一本は右ひざの上に小さく刻み出されている。

(ホ) 不空羅索観音

霊場中この観音像を本尊とするのは第九番

(興福寺南円堂)のみでその像は一面三目八臂の座像に造られている。

この石仏群の尊容は、一鉢三面六臂の座像に造られていて、温顔の三面は並んで正面を向き、あたかも一鉢の仏像の背後から他の二仏が首部と四臂のみを左右にのぞかせているかのようである。

(ハ) 准胝観音

この観音像も第十一番(深雪山山醍醐寺)のみに本尊としてまつられていて、頭部に宝冠をつけた一面三目十八臂の座像である。

ここでは不空羅索観音と同じように一鉢三面に造られていて胸前に合せた両掌に宝珠を捧出し、左手に揚杖、右手には三鈷戟を捧持した四臂の座像につくられ、そして三面共に頭上に宝冠を明確に陽刻している。

(ト) 馬頭観音

この観音像を本尊とする霊場は第二九番(東舞鶴市松尾寺)のみで座像である。

儀軌によれば三面六臂の立像でその他は誠に複雑であるが、この観音像は江戸時代に入って馬匹関係者の信仰対象像となって有名なので解説は略す。

ここでは三面共に二眼で正面頭上に宝馬を



番外(九番と十番の間)約四年前の状況

(ハ) 番外仏

第二番と第三番

間の石仏

円光を背に合掌した地藏仏の座像である。蓮座、光背の彫法からして

新しい造りで、これは大正七、八年前ごろ上唐櫃の四鬼家が建造した立江地藏尊である。

第九番と第十番間の石仏

一石に三体の仏が陽刻されている。中尊は大きく両脇侍はやや小さい。三尊ともに古風な蓮座上に立ち舟型光背の中に肉厚に彫出されている。

中尊は光背一ばいに陰刻された放射光を背に、左手は与願印、右手は施無畏印を結び、両脇侍は共に宝冠を頂き胸の前で両掌を結んでいる。これは善光寺式弥陀三尊像である。

石質も他の観音像が淡河石と謂われる彫造し易い花崗岩なのに、この石仏は堅い御影石

(花崗岩)で彫造されていて、その彫法技術の素晴しさは尊容の古風と共に、この石仏群中では随一の作品である。

第二〇番と第二一番間の石仏

石龕が崩れ果ててあたりに散らばる蛙の斜面の中ほどに、智拳印を結んだ石仏が雨露にさらされてポツンと立っている。

金剛界大日如来像である。

石質が柔いためであろう。ノミのあとも確か、宝冠、装身具等実に緻密に彫出されている。

四、寄進者について

その人達の名は立ち並ぶ石仏の、ところどころの台石の正面に細字で陰刻されてのぞいていた。

山土や苔に埋もれたこの三十三体全部の台石の正面の土を掘り起せば、その寄進者の全貌は把握されるであろう。だがそれは許されないのである。あるものは台石全部が深く土中に埋もれ、またすでに崩れかかっている石龕の屋根石が舟型光背の石仏の上に乗りかかることによって、やっと原型を止め、またあ

頂き、合掌した二臂、鉞斧鈎と三鈷戟を捧持する二臂、胴部より両側へひろげた二臂の六臂座像に造られている。そして両側に首を出す二面は前述同様、三面共にズラリと並んで正面へ顔を向ける平面手法に造られていて、右側の顔のみが忿怒相を現しているのが特に印象的である。

この山路を往来した馬方達は、この馬頭観音を特に祈願したのであろう、この石仏の前面は広く整地されている。

るものは半壊状態の石龕の中に石仏が立っているののである。

こうした台石の正面の土を掘り起せば、前下りの地盤は緩み次第に前傾して石龕が崩壊すると共に石仏もまた転倒して、その埋没を速進するであろう危険性は高いのである。

そこで、すべての台石からその名を明らかにしようとは試みなかった。

だが、その台石が銘記を全くのぞかせているもの、または倒壊のおそれを見ない安定した石龕の内において、正面の土をわずかに除くことによって判読し得る施主名などを長い期間を通じてたびたび探訪を重ね、コソコツとそして次ぎつぎに書き取っていった。

そしてそこに姓が全く見られないことによつて、江戸時代の造建物であると推察はついた。庶民に姓が許されるのは次による。

明治新政府は太政官布告によつて、明治三年九月十九日、

- もつとも祖先以来苗字不分明の向は、あらたに苗字をもうけ候様致すべく、この旨布告候こと、以上の通りである。
- 第一番 下□□
- 太兵衛
- 第二番 上唐櫃
- 西垣 嘉太夫
- 平見 十兵衛
- 第三番 灘水車新田 大利兵五郎 謹建
- 千時文政八年 乙 西七月
- 尊像の左に「為先祖代々菩提」
- 灘区大土平町一―二大利信正氏へ早速問合せたことろ次の御返信を頂いた。
- 初代 五右エ門信昌
- 二代 五右エ門信満
- 寛政十年（一七九八）二月三日没
- 三代 兵五郎信道

- 文政十丁亥（一八二七）八月二五日落
- 法名 淳徳院如実信進居士 享年五十八
- 台石にある文政八年は信道氏五十六才の時に当り、三番石仏の寄進者は三代兵五郎信道氏であることが判明した。
- 番外 善光寺仏
- 施主 上唐櫃
- 鍋屋 太右エ門
- 七郎兵衛
- 宗兵衛
- 又兵衛
- 文政八 乙 西七月
- 鍋屋太右エ門は上唐櫃の庄屋を勤め、有馬の郷土史家風早恂氏の御研究によると、天保七、八年の飢饉の時、有馬、船坂、唐櫃の庄屋総代として救済援助を行い、有馬極楽寺の墓地に天保九年四月建立の彰徳碑が現存し、檀那寺である上唐櫃西光寺の過去帳によると
- 「円通院梵誓海音良潮禪定門
- 庄屋太右衛門奉 松兵衛父
- 弘化四年六月廿四日歿 六十九才
- と記されている。文政八年、太右エ門は四十才であった。
- 第十一番

下唐櫃

女中

この本尊仏准胝観音は、一名准胝仏母とも尊称され、敬愛、求児、延命を祈願すれば効があるといえられる。下唐櫃の善女達が女性の力のみで寄進したのである。

- 第十二番 下施主 吉大夫 治兵衛
- 万右エ門 安右エ門
- 龜右エ門 兵左エ門
- 源右エ門 又左エ門
- 利兵衛 忠治良
- 喜平治 伊左エ門
- 第十三番 施主 下芝田
- 彦左エ門
- 第十四番 兵庫津
- 魚屋
- 登□
- 政吉
- 住吉屋

□□

碑面上部十四番の字及び尊容の両側に

- 先祖 説應妙意
- 代々 善達童子
- 第十六番 下唐櫃 施主 上中
- 儀右エ門
- 第十九番 世話人 八良左エ門 作兵衛
- 藤五郎 金五良
- 弥七 文左エ門
- 五兵衛 孫兵衛
- 佐兵衛 安五良
- 彦兵衛 武右エ門
- 清大夫 為大夫
- 伊左右エ門 定七
- 安右エ門 藤左エ門
- 八右エ門 源兵衛
- 乙二良 儀左エ門
- 市左エ門 平右エ門

この第十九番は道筋を離れた尾根上に建ちこ

の山路に並ぶ観音石仏群全部の建造世話人一同の寄進と思われる。

- 第二十番 上唐櫃 林左エ門 喜左エ門 定右エ門 権兵衛 民右エ門 直七 勘六
- 番外 大日如来像 五社石工 正兵衛
- 石の花立に 下市ヶ村忠兵衛
- 第二十二番 下西向 半兵衛
- 第二十三番 下唐櫃 新左エ門
- 第二十四番 台石は全く埋れ寄進者名不明
- 舟型光背碑石の左側に「為圓室明鏡信女」

二本の花立に(円筒型)

「施主丹州笹山西吹村宗左エ門同世話人」

「丹州笹山尾上村 世話人 磯七」

線香立(壺状型)に

「施主 結場 武田儀右エ門」

武田儀兵エ」

第廿六番

上唐戸 久兵エ

三木町 宗兵エ

井上村 嘉兵エ

この台石は後補か、新しい。

第廿七番

上唐戸

鍋屋松

この寄進者は前記鍋屋太右エ門の息

尊像の左に

「明譽梵光清音信女」

第廿八番

下唐戸

佐兵エ

『有野村誌』によると、

「唐櫃石神社石祠の内正面に

元禄五壬申十一月吉祥大井連御宝殿

施主 唐櫃村庄屋 佐兵衛」

とある。佐兵エ家は名家として唐櫃村に代々
永く盛んであった家系と思われる。第十九番
の世話人中にも佐兵エの名を記す。

第卅三番

法性寺助譽

谷汲寺

西光寺民譽

西光寺民譽については『有野村誌』に詳し
く記されていた。

民譽は西光寺第廿一代邦蓮社民譽上人豊山
和尚、文化三年(一八〇六)五月九日入寺、
天保四年(一八三三)旧十一月五日、六十三
才で寂す。文政八年(一八二五)には五十五
才であった。

西光寺墓地に民譽の無縫塔墓碑ありと、筆
者は供花をたずさえて西光寺を訪れた。

五、造建時について

山野に点在する石仏の造建日やその由緒は
それ自体に刻まれている以外、古い文書によ
って確認されることは極くまれである。

庶民達の造建にかかる石造遺品について、
そこまで追求する執念は徒労に終るのが多

い、ところが、上唐櫃西光寺にはそれが保存
されていた。二度、三度と大火をこうむりそ
の寺域にも変転があったと訊くが寺院で最も
大切にされる過去帳の綴りの内に記入されて
いたので、今日まで保存されていたのであつ
た。

調査の要旨と訪問日を知りておいて、後
日西光寺を尋ねると、招き入れられた一室に
おいて、住職木全靈明師老僧は第一過去帳と
記された綴り帖を開かれた。

そこには次の様に記されていた。
文政八四年七月廿五日
三十三番谷汲寺十一面観音石像一鉢
代十八文目

記

八文目四分 六字彫刻代字数廿八字
四文目 ダチン

十七文目 ホコラ拵料

式文 道造料

二文目四分 酒貳舛

二文目 大塔婆大工手間賃老人代

これを老師の説に従って詳しく述べる。

代十八文目は、台石をふくめて観音石仏の
製作費。八文目四分は石面に陰刻した廿八字

の彫り賃。四文目ダチンは「駄賃」で石像を

製作した地より山上の安置現場までの運搬
賃。十七文目は石龕の建造費、式文は道筋よ
り五米ほどはなれた石龕の位置までの道の切
り開き料、二文目四分は石工や石龕及び道を
切り開いて造った人々へふるまった酒貳舛
(容量不明)の代金。最後の二文目は石仏群
の完成供養を行った場所に立てた木製塔婆の
製作費。とのお話であった。

この内、疑問点は六字彫刻代の文字数であ
る。西光寺は浄土宗なので「南無阿弥陀仏」
の六文字であろうが、石仏とは別にこの六文
字を刻んだ石碑があり、山中に埋もれている
のだろうか。またこの六文字をのぞいても、
あと廿二文字なければならぬが、筆者が見
ることのできた文字数は、第卅三番の四文字
と、法性寺助譽、谷汲寺、西光寺民譽の十三
文字で、計十七文字となる。あとの五文字は
どこに刻まれたのであろうか。

以上によって、この石仏群は番外仏の一分
をのぞいて、文政八年七月中に造建されたの
は確実となった。これを傍証するものは第三
番(大利家寄進)と番外仏(善光寺仏)の台
石に見られる紀年銘である。

『有野村誌』に次のような記載がある。

「灘地方に於ける醸酒業の勃興に依り、撰
北各地の米穀が酒米として販路が開かれてよ
り、これら各地より米穀を牛馬の背に荷して
唐櫃部落に至り、この山麓にて牛馬を替へ山
上に運び此処に再び馬を替えて南麓に群生せ
る水車に持込まれ、ここにて酒米として精白
に供せられ、亦山上にて米の売却或は物々交
換をばなし、再び唐櫃部落に帰り来るとい
う状態にして、替場、泊場が唐櫃の諸々に設け
られるに至った。この馬子は殆んど唐櫃住民
の男子が之に当り」以下略

当時酒米運搬に従事した唐櫃住民の状況並
びに山路の盛況がよく語られている。

撰北地方の余り米は有野川沿いに下唐櫃に
集り、播磨方面からは大粒の酒米「山田錦」
が山田村を経て山伏峠を越して上唐櫃へと達
し、共にこの唐櫃道を通じて灘方面へ運ばれ
て行った。唐櫃村の住民は多忙を極めると共
に経済力を増し、この山路は富を招き寄せる
道であった。

その道筋に行路安全を祈って、観音石仏の
造建計画が起った時、かねがね観音信仰をも
つ村民はこぞって賛意を表し寄進を申し出た

ことであろう。その時期は徳川幕政も末に近
い今より約百五十年前に当る。

かの有名な灘の醸造家山邑太左エ門(桜正
宗醸造元の祖先)が、西宮の宮水を研究して
日本一の美酒を造り上げたのは天保十一年
(一八四〇)と伝わる。それに先立つ十五年
以前に、この観音群像はこの山路に立ち並ん
だのであった。

付記

西光寺住職木全靈明氏、上唐櫃出身在東灘
の芝見氏並びに多くの方々よりの御教示を
感謝します。

八一七巻四号 90号V正誤表

4 ページ下段図3	復元図↓復元図
31 ページ上段4行	ひろびろとしたところ↓寺池 を埋めて
〃	下段8行 質実剛健↓質素剛健
36 ページ二段2行	直後物↓直後編
14 ページ上段18行	元台と藍伽の↓天台伽藍